

沢木耕太郎

敗れざる者たち

沢木耕太郎

敗れざる者たち

文藝春秋

著者略歴

昭和22年東京に生まれる。昭和45年横浜国立
大学卒業。フリーのルポライターとして雑誌
テレビ等で幅広く活躍中。著書に「若き実力
者たち」がある。

敗れざる者たち

昭和五十一年六月二十五日第一刷
昭和五十一年十一月五日第三刷

著者 沢木耕太郎
さわき こうたろう

発行者 阿部亥太郎

発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三番地
電話 東京(二六五)一二二一

郵便番号一〇二
印刷所 凸版印刷
製本所 加藤製本

※万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

クレイになれなかった男

5

三人の三塁手

59

長距離ランナーの遺書

95

イシノヒカル、おまえは走った！

141

さらば宝石

189

ドランカー〈酔いどれ〉

227

装
幀

平
野
甲
賀

敗れざる者たち

「あつしは闘牛士なんでさ」
と、マヌエルは言つた。

A・ヘミングウェイ

クレイになれなかった男

リングの方からは観客の熱狂的な声援が聞こえてくる。セミ・ファイナルは韓国人同士の対戦だが、激しい打ち合いになっているようだ。

《今やってる金なんとかっていう人ね、ぼくが韓国で試合するといつも前座に出てくるんだな。いつも勝つ、そしてぼくはメイン・イベントでいつも負ける》

そういつてカシアス内藤は少し笑った。そこへ金が引き上げて来た。顔が腫れ、血が流れている。

《勝ったんでしょ？》

内藤が訊ねた。金は一瞬とまどったような表情を見せたが、首を振った。内藤は肩をすくめて、ぼくと顔を見合わせた。しかし悪い辻占ではなかった。いつも前座で勝つ金が今日は負けた。それなら彼のあとで三度が三度とも負けている内藤は、もしかしたら……。ぼくが笑うと、内藤も笑った。互いにチラとそう考えたことがよくわかったからだ。

《早くやって、早く帰ろう。暑くてたまらん》

マネージャー兼セコンドの伊藤良雄がそういった。確かにこの控室は暑すぎた。ガラーンとしたコンクリートむき出しの空間に、裸電球が一つだけぶら下がっている。窓もなく暗くジメジメしていた。椅子ひとつ用意されているわけでもない。ドサ回りのボクサーには相応しい待遇といえるのかもしれない。しかし、これからカシアス内藤が闘わなければならなかったのは、「東洋ミドル級タイトル・マッチ」だったのである。

七月十四日。韓国。釜山の九龍体育館には六千人余りの客が入った。韓国の英雄、東洋ミドル級チャンピオン・柳済斗と元東洋同級チャンピオン・カシアス内藤の十二回戦を見るために、さうにえば柳が日本人とアメリカ人とのハーフを叩きのめすのを見るために、だ。

内藤が純白のガウンを着た。いよいよ入場。

試合場に内藤が姿を現わすと、ホォーというようなざわめきが生まれる。バラバラと拍手。

リングにはすでに柳済斗が上がっている。内藤がロープをくぐると、待ちかねたようにセレモニーが始まる。内藤はその間しきりに肩を動かし小刻みに足を振る。柳はほとんど躰も表情も動かさない。リング・アナに名を呼ばれた時だけ少し手を上にあげ観客の拍手に応えた。内藤は両手をあげ一回りしながら何度も頭を下げた。

《なーとー》

と妙なアクセントの声援がとぶ。内藤は不思議そうに顔をあげる。しかし、この中に日本人がいるのかどうかは、日の丸でも振らないかぎり区別がつかない。だが、日本人がわざわざこの試合を見に来るはずもなかった。

柳と内藤がレフェリーから注意を受ける。二人ともうなずいてはいるが明らかに面倒臭そうだ。コーナーに戻る。内藤はロープにつかまり、首を回す。不意に両手をダラリと垂れ、眼を閉じたまま顔を天井に向けた。それは何ものかに祈りを捧げているかのような姿だった。しばらくジッと動かない。

ゴングが鳴った。内藤は突然眠りを醒まされたような不機嫌な表情で振り向いた。

《やれよ！》

ぼくがリングの下からいうと、マウスピースの上から動かしにくそうに、しかしニヤッと笑った。内藤はまだやる気がある。彼はぼくとの暗黙の約束を守ろうとしている。そう思うとぼくの胸も少し震えた。

内藤はリングの中央で、柳とグローブを交じえた。四度目の対戦だった。最初は悲劇でも二度目は茶番だという。なら三度目は話にもならぬナンセンス劇なのかもしれない。まして柳―内藤戦は四度目なのだ。しかし、とぼくには思えた。二度目が茶番で三度目がナンセンスであっても、四度目にもなればこれはもう再び悲劇なのだ、と。

肩をゆすりながら、内藤は柳の左に回り込む。ライトに照らされて彼の黒い肌は艶やかに美しく映えた。

《シュッ！》

鋭い息を吐いて、柳が左のストレートを繰り出した。それがこの暑く長い試合の始まりだった。

カシアス内藤は不思議なボクサーだった。

少なくともぼくにとっては気になるボクサーだった。デビュー以来、連勝街道を驍進している時でさえ彼は常に中途半端なボクシングしかして来なかった。時折、テレビで彼の試合を見ると苛立たしくなると、スイッチを切りたくなることもあった。追いつめながら、あと一発でKOシーンだというのに、フツと打つのを止めてしまうのだ。

ぼくにとってボクサーとは、例えばジョー・メデル、例えば金沢和良のことだ。

ジョー・メデル。彼はついにチャンピオンとはならなかったが、“無冠の帝王”の名に相応しい最高級のボクサーだった。彼の鮮やかな二つのKOシーンは今でも明瞭に思い浮べることができ。

その二つの試合はメデルにとっても最上の出来だったろうが、ぼくにとっても強烈な、忘れることのできない酔うような試合だった。偶然ぼくは二つともテレビで見ていた。

ひとつは対関光徳戦。一度ダウンを奪われた関は五回にラッシュした。左右の連打が決まり、メデルを追いつめた。メデルは両手でしっかりブロックするのが精一杯だ。ぼくは《関、やれ！最後だ！》と熱狂して叫んだ。それが耳元に届いたかのように関はとどめの一発を放った。次の瞬間、崩れるように倒れたのは関だった。何がどうしたのかよくわからなかった。カウント・テン。関は起き上がれなかった。スロー・ビデオが出て、やっと事態のみこめた。彼は打たれていたのではなく、打たせていたのだ。打たせながら冷静に関を見ていた。大きく眼を見開いているのがスロー・ビデオではよくわかった。関が最後の一発、と踏み込んだ時、メデルの右フックが

関の顔を強烈なカウンターとして見舞ったのだ。たったその一発で関はマットに崩れ落ちた。

もうひとつは、それから二年後の対ファイティング原田戦。原田はラッシュヤーらしくもちまえる馬力で、足を使って逃げるメデルに接近しインファイトに持ち込んだ。原田のラッシュにメデルのアウト・ボクシングも封じられたかに思えた。少なくとも五回まで一方的に原田が攻めまくった。六回に入っても原田は追いかけ、ついにロープに追いつめた。原田のラッシュ。左右の連打がともどもなくメデルを襲う。ファンは熱狂した。

《原田GO、GO!》

その時、ぼくはメデルだけを見ていた。関とのあのシーンを思い出したからだ。亀のように丸くなってカパーリングしているメデルに、原田のパンチは実のところ一発も入っていなかった。すべて腕の上を叩いているにすぎなかったのだ。打たれながら、いや打たせながらコールマンひげのメデルは、冷たい顔でじっと原田を見ていた。それは明らかに獲物を狙っている獣の冷たさだった。突然、メデルの右アッパーが原田の顎を抉った。もうその次の瞬間には、メデルはスタスタと自分のコーナーに戻っていった。六回一分五秒、今までの攻勢が信じられないほど無惨に原田は敗れた。メデルは表情ひとつ変えなかった。

ボクシング年鑑で調べるとそれはぼくが中学生の頃なのだが、この二つのKOシーンの印象は強烈だった。たった一発のパンチで攻めている者がマットに這い、勝敗が逆転する。いわば世界が一瞬のうちに変わるのだ。こんなことが世の中にはあるのだ！ 少年時代のぼくにとって、それは世界へのひとつの開示だった。

メデルは世界バンタム級第一位が最高の、最後まで無冠のボクサーだった。それは史上最強のバンタム級王者、エデル・ジョフレと同時代に生まれた者の不運だったかもしれない。メデルは、ブラジルでジョフレに挑戦した。しかし、メデルは原田を一発で屠った六回一分五秒と全く寸分違わぬタイムで、ジョフレにマット上に沈められた。だが、このジョフレも昭和四十年には、メデルに敗れた原田によって王座を奪われる。メデル、ジョフレ、原田が不思議な因縁で結ばれていたこの時代こそが、バンタム級の黄金時代だった。

がともかく、メデルの冷たい眼とそれに相応しい冴え冴えとしたパンチの鋭さ、これこそがボクサーであり、ボクシングだとぼくには思えた。以後、現在に至るまでこれほど神話的なノック・アウトは一度も見えていない。

金沢和良。金沢は必ずしも一流のボクサーではなかったが、彼にとつてのラスト・チャンスに見せたファイトの魂は、もうひとつのボクシングの極をいくものだった。ぼくはそう思う。

昭和四十六年十月、金沢はオリバレスの世界J・ライト級に挑戦した。下馬評は圧倒的にオリバレス有利、金沢のチャレンジは無謀とされた。だが、金沢は健闘した。主武器の右ストレートを有効に使い、十三回にはあと一発というところまで追い込んだ。そして十四回、もう金沢には余力がなかった。オリバレスは反撃に出た。一発、二発、金沢の身にパンチがめり込む。金沢ダウン。起き上がる。オリバレスのパンチ。二度目のダウン。しかしヨタヨタしながら金沢は立ち上がった。そして、凄まじい形相で、口を大きく開けて絶叫したのだ。もちろん歓声によってかき消されはしたが、ぼくには彼が何といっているかはっきりわかった。

《このヤロー！》

そう叫んでいたのだ。相手に対してというより、自分自身に向かって絶叫していたのだ。《このヤロー！》——大きなパンチをふるってオリバレスに向かっていったが、五秒とたたぬうちに、三度マッ^{みたひ}ツに這わされた。

負けはしたが、そして「やはり金沢敗れる」という調子でジャーナリズムに嘲笑されたが、プロスポーツとは、まさにこの叫びそのものではないか、とぼくには思えた。

メデルの「冷たさ」と金沢の「叫び」、その中にぼくのボクサーに対するメジャーがある。しかし、カシアス内藤はそのどちらからも遠かった。小気味よいフットワークで彼のアウト・ボクシングのリズムに相手を引き入れる。効果的なジャブから一転してインファイトした時の左右のフック。どれをとっても見事だった。しかし、あと一息というところで、彼はいつも止めてしまふ。あたかも長距離ランナーが見舞われるブレーキのように、彼も足が動かなくなるのだった。恐る恐る相手を殴り、ためらいながらボクシングをする。

普通なら、それだけで興味は失われるのだが、内藤はちがった。ぼくにはそのようなカシアス内藤というボクサーが、妙に近しく思えたのだ。同世代という言葉があるとすれば、正しく彼は同世代人だった。もちろん、単に年齢が近いというばかりではない。彼もまた迷っている。自分の宿命とどう折り合いをつけていいのか戸惑っている。その「迷い」が不思議な実在感をもってぼくに迫ってきたのだ。言葉にすれば、

《奴も苦勞しているな》

という思いだった。

カシアス内藤は十六連勝し、二十歳で日本ミドル級チャンピオンになった。翌年、東洋ミドル級チャンピオン。しかし、その年のうちに、柳済斗によって東洋タイトルを奪われてからは、ふっと消えたように彼のニュースが聞こえなくなった。たまたま眼にする戦績は敗戦だけ。そして、それすらも眼につかなくなっていた。もうやめたのかもしれない。最近までそう思っていた。

ボクシングの雑誌にはなかなか面白い記事が載っているが、投稿以上に面白いというわけにはいかない。中でも「文通しましょう」などという欄は読んでいて吹き出したくなるほどの傑作揃いだ。

投稿欄には、「ボクシングQ&A」というコーナーもある。ほんの僅かな行数のうちに長大な文章も及ばぬ衝撃を与えられたりする。

「[問]世界J・ウェルター級チャンピオンの藤猛は、誰にタイトルを奪われ、いまはなにをしていますか 品川区・山中国彦

「[答]四十三年の十二月十二日、東京・蔵前国技館でニコリノ・ローチェ（アルゼンチン）に十回五秒のKO負けで王座を奪われました。

現在は本誌六月号で報じられているようにハワイで自分の車を運転しながら観光ガイドをやっております」

ローチェの鋭いジャブによって顔がぶくぶくに脹れあがり、眼がつぶれ、ただ両手を振り回す